

羞恥心に関する介護学生の意識変化についての一考察

初めての実習を通して

A Study of a Change in Student's Awareness of the Sense of Shame : Through the first Care-work Practice

人見優子

Yuko Hitomi

要約

本研究の目的は、入学間もない学生達の羞恥に関連した意識・認識の状況や介護時の視点が、学内での学びや初めての実習（介護実習ⅠA）を経てどのように変化がもたらされているのかを知ることである。そこで介護福祉士養成校に在籍する1年生38名に自己記入式調査票を用いて調査した。

その結果、実習後の学生達は、ヒトの性や成長・発達について興味を増し、学習意欲が向上していた。そして羞恥心に関する認識や介護時の視点に変化が表れ、学内での介護技術演習時に実際の現場を想像する力が増加した。また、介護観や自身の価値観、思考、行動の変化が見られ、それらを自己認識することができていた。しかしその一方で、将来に対する迷いや意欲の低下を招いた学生もいた。さらには、羞恥に配慮するための基本的な生活習慣や社会的常識、しつけといった基本的な人格形成を促す上での課題が示唆された。

キーワード：介護技術・介護実習・身体接触のある介護・羞恥心

目次

- I 研究の背景と目的
- II 羞恥心について
- III 調査方法
 - 1 調査対象
 - 2 調査期間
 - 3 調査内容
 - 4 配布と回収方法及び同意を得る方法
 - 5 学生への用語の説明
- IV 結果と考察
 - 1 学生の属性
 - 2 介護の実施経験状況について
 - 3 学生の性や健康に対する意識について
 - 4 身体接触のある介護を実施する際の羞恥心について
 - 5 身体接触のある介護実施時の視点について
 - 6 実習経験による意識変化の自己認識について
- V まとめ

I 研究の背景と目的

介護福祉士養成校において学生達は、入学直後から専門的な知識及び技術を習得するための教育を受ける。その一つとして介護技術 I があり、「対人援助としての介護技術の特性を理解した上で、日常生活の援助に必要な基礎的介護技術の知識・方法・態度について習得する。主には食事・排泄・清潔・移動や環境整備等を通して、高齢者や障害者の特性および具体的な生活場면을踏まえた基礎的な介助方法について学ぶ。」¹⁾ ことを目的として講義・演習がすすめられている。

入学間もない学生達は、興味や関心をもち、意欲的に介護技術演習に取り組む姿が多い。しかしその一方で、消極的で学習意欲が不明確な学生の姿も見受けられる。中には、お洒落や友人との楽しみが優先される学生もあり、それぞれの価値観に基づく態度・行動が突出し、自発的に実習前の環境・身支度を整える姿があまりみられない。またこのような意識低下が見られる時は、授業中にも私語や笑い声、ふざけあいの行動として、身体接触のある介護時に利用者役の学生に対する羞恥心への配慮に欠ける場面として現れることがある。どのような授業態度の学生であっても、いわゆる介護技術の習得・向上には関心が高く、介護技術演習や介護実習に対する満足度を実技が上達したか否かに基準を置く傾向に

ある。しかし、介護福祉士としての専門意識を高め、現場へと赴くことはもちろんのこと、一社会人としての基本的な姿勢をもって、被介護者にかかわり、利用者に配慮をしなければならぬと考える。

筆者は、学生自身の羞恥心に対する認識や羞恥心の発生が伴うと考えられる身体接触のある介護時の学生の視点に注目することで、介護技術演習や介護実習の経験を経て、学生の意識や行動に変化が見られるのではないかと推測した。そのため、学生達が性や健康に対してどのような意識をもっているのか、演習や実際の介護場面ではどのような視点をもって演習・実技を実施しているのか、また学内での学びや実習経験は、どのような意識の変化をもたらすことができたのかを知るために調査をすることにした。

II 羞恥心について

筆者は介護者がもつ羞恥心と被介護者の羞恥心への配慮の関係について、調査研究を行っている。介護教育において介護学生は、被対象者のもつ羞恥心への配慮と介護する側のもつ羞恥心について、学内及び学外の様々な場面において学ぶ機会を得られている。学内では、介護技術等で床上排泄や清拭など身体接触のある介護において、学生が介護者役と利用者役の両方を体験することで、技術を習得すると共に、羞恥心について考える機会を得るだろう。

羞恥心とは、日常一般的に感じる羞恥感情である。菅原は、「人類に普遍的であり、かつ人類に特有の感情である」、その一方で、「その表れ方や働きは極めて複雑で、文化、社会、時代と相互し合いながらその様相を大きく変化させる」²⁾感情であるとした。託摩⁽¹⁾は、羞恥感情が文化やその場の状況、個人の感じ方の差により大きく異なることが羞恥感情の特徴としてあげ、幅広く、程度・内容の多種多様性をあげている。この羞恥感情は、作田、井上、内沼ら⁽²⁾により私恥・公恥・羞恥の3つに分類できることが一般的であるが、これらはいくまで研究者の経験や知見に基づく主観的分類であることも指摘されている。また、基準を主に羞恥感情が生じる場面ごとにおいた客観的羞恥感情では、特定の羞恥感情は、特定の場面・状況に結びついていることを前提とした。そして成田、菅原、橋本らも新たな分類検討したが、いずれの分類も、共通して出現するものではなく、羞恥感情が十分に網羅されている単独の研究は現在のところ見あたらない。

そして介護者はもちろん、看護者のもつ羞恥心に焦点を当てた研究についてもあまり存在しない。最も現実を考えれば、20歳前後の若者が日常の介護場面で羞恥心を生じるのは当然ではないかとの考えが一般的だ。しかし、常識や羞恥心に関する研究にふれ、生活文化の差異から生じる生活習慣上の相違が、羞恥心の捉え方に影響を与えることを知り、介護場面において生じる羞恥心に関して長い人生を歩んだ利用者や現代を生きる介護学生と

に捉え方の格差があるのではないかと考えている。すなわち介護学生が被介護者の羞恥心に配慮するためには、学生自身が羞恥に関連する性や成長発達をどのように受け止めているのか、また他者の羞恥心をどのように認識しているのか、そして介護時にはどのような視点をもって被介護者と関わっているのかを知ることが大切な要素だと考えている。

本調査では、学生や利用者の羞恥心が生じる起序について明確にするものではないことを前提にし、「羞恥心」とは、ヘレン・メリーライド⁽³⁾のshame、マックス・シェーラー⁽⁴⁾の羞恥心に基づき、「他人にみられたくない身体部分を他者から注視された際に生じる恥ずかしいと感じる気持ち」と定義し、学生に説明した。

Ⅲ 調査方法

- 1 調査対象：A 短期大学1年生男女39名。
- 2 調査の期間：第1回調査は、平成20年4月23日～4月25日まで、第2回調査は、平成20年7月14日～7月15日までとした。
- 3 調査内容：調査票の質問内容は、次の通りである。

第1回調査は、学生自身に関する質問（属性）4項目、学生の性や健康に対する意識に関する質問3項目、学生の身体援助時の意識に関する質問6項目、学生の介護実施時の視点に関する項目7項目、その他1項目とした。第2回調査は、第1回調査項目に加え、実習前後の意識変化に関する項目を3項目追加した。

回答方法は、選択回答方式及び一部自由記載とした。また第1回調査では、実際には身体接触のある介護について、介護技術演習を実施していない項目があるため、自己の回答時の考えに基づき記載するよう説明した。

- 4 配布と回収、同意を得る方法

調査には、自己作成した記述式質問票を使用し、研究説明書（①研究の目的および内容について、②研究への参加・協力の自由意思について、③研究への参加・協力の拒否権、④個人情報の保護について、⑤プライバシーの保護）と共に配布した。同意の意思がある学生については、研究参加同意書に署名の上、無記名で質問票の記入を行ってもらった。

回収については、第1回目は専用箱への投函、第2回目はその場で直接回収した。

- 5 学生への用語の説明と設問の補足

以下の点について、回答前に事前説明をした。

本調査において、①「身体接触のある介護」とは、「排泄介助・入浴介助・清拭・衣服の着脱」と限定すること、②「清拭とは」、「入浴の代わりとして居室内で身体を拭くこと（目的の説明はなし）」とすること、③「羞恥心とは」、「露出した身体の一部をみ

られたり、接触することなどで生じる恥ずかしいと感じる気持ち」とすること、④状況設定がない設問について、利用者は居室ベッド上で臥位の状態にあり、性別は定めないこととする。

IV 結果と考察

1 学生の属性

介護福祉士養成校に在籍する1年生38人に自己記入式調査票を配布、37人より回収した。そのうち有効回答数は37人、有効回答率は93.5%であった。37人のうち、男性が6人、女性が31人、高齢者施設で実習をした学生が18人、障害者施設で実習をした学生は19人であった。

2 介護の経験状況について

図1、図2は実際の介護現場で身体接触のある介護を実施することについて、同性介護及び異性介護の経験の有無を実習前後で比較したものである。介護福祉士養成校には、福祉系高校からの進学者やホームヘルパーの資格を有する者が在籍していることもあり、介護福祉士養成校入学前から介護の経験をもつ学生がいる。実習前に「介護の経験がある」とした学生は、同性介護で7人、異性介護で8人と20%程度であった。実習後には、同性介護で37人、100%の学生が、異性介護では26人、70%の学生が実施経験していた。学生達は、第一段階の実習である介護実習ⅠAにおいて、全ての学生が何らかの身体接触のある介護を実施経験していた。

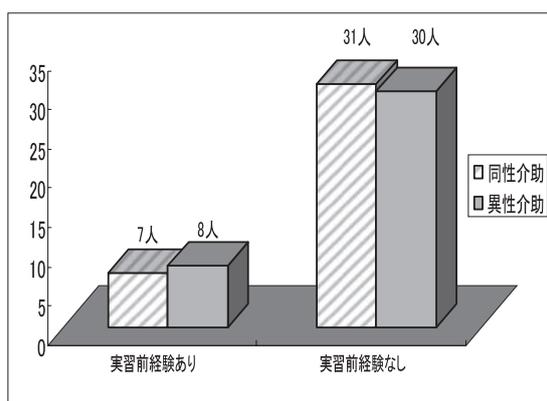


図1 同性・異性介護の経験の有無（実習前）

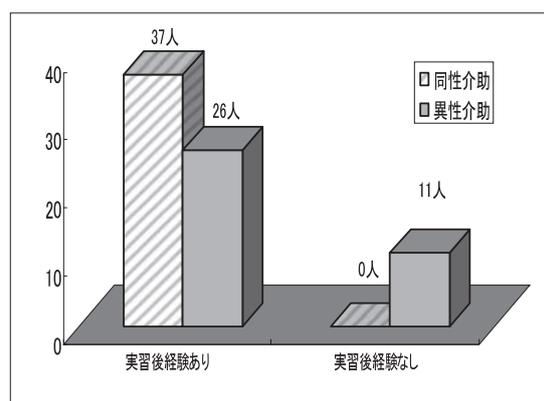


図2 同性・異性介護の経験の有無（実習時）

図3は、実際に身体接触のある介護を実施した際の内容について示している。同性介護では、「衣服の着脱」29人、「尿器・便器・トイレ介助」28人、「オムツ交換」27人、「入

浴介助」と「清拭」各23人だった。同性介助については、すべての項目について6割を超える学生が実施経験していた。一方、異性介助では、「衣服の着脱」16人、43%と最も多く、「尿器・便器・トイレ介助」13人、「オムツ交換」11人、「入浴介助」9人、「清拭」8人と続いた。全体数が37人と少ないため、大きな違いを指摘することはできないが、今回の調査の中において1年生の段階では、同性介助・異性介助に関わらず「衣服の着脱」、「尿器・便器・トイレ介助」、「オムツ交換」の実施が上位を占めていた。

学生達は介護実習ⅠAをすすめるにあたり、「日常生活援助では食事・着脱介助からはじめて、排泄・移動・入浴介助などを体験する」²⁾ことを学生・施設・教員の共通認識としているため、身体接触のある介護については「衣服の着脱」、「尿器・便器・トイレ介助」、「オムツ交換」の実施が上位を占めることは当然のことだろう。しかしながら、学内では同性介助に重きをおき学習する学生達が、実際の現場においては、7割もの学生が異性介助を実施したことが分かった。本調査では、異性介助に携わる学生の気持ちについては、触れていないが、今後このような状況下で実習を行う学生達の心情を知り、サポートしていく必要があるだろう。

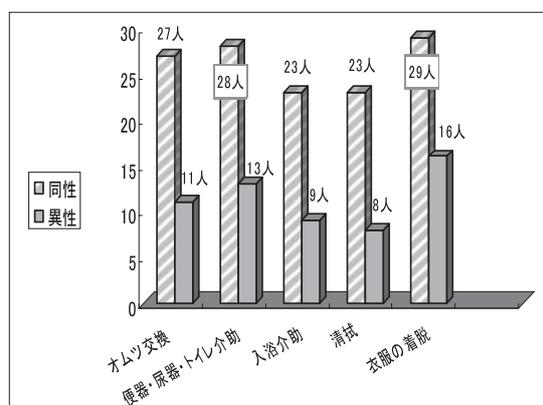


図3 実習時に身体接触のある介護を実施した内容

3 学生の性や健康に対する意識について

図4は、学生がもつ性や人の成長発達に対する興味の度合いについて、実習前・後の違いを示している。実習前・後ともに「少し興味をもった」が最も多かった。しかし、実習前において「とても興味をもった」「少し興味をもった」の合計が21人、「あまり興味がない」「全く興味がない」の合計が16人であったものの、実習後には、前者が30人、後者が7人と、興味をもつ傾向に24%増加している。学生達は実習を行うことで、性やヒトの成長発達について少しずつだが、興味を増していることが考えられる。

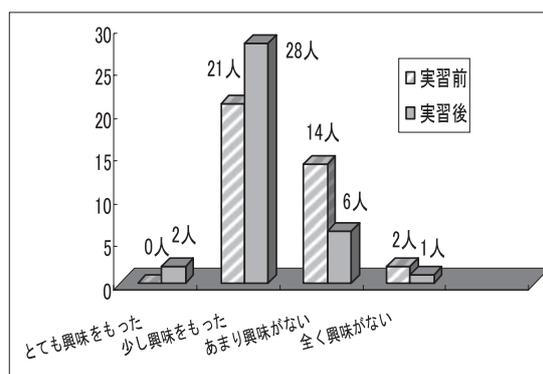


図4 性やヒトの成長発達に関する興味関心の変化

図5、図6は、実習前・後に学生が性やヒトの成長発達に関する知識を有していたか否かの認識をまとめている。実習前・後とも、すべての項目において「知識は普通」と回答した学生が著しく多かった。しかし、図7で「知識が豊富」、図8で「知識がない」と回

答した学生の実習前・後の比較をみると、「知識が豊富」では、すべての項目において少数ながら増加傾向にあった。「身体のおくみ」については、実習前には0人であったが、実習後には8人が「知識がある」と認識していた。また、実習前には、高齢者の心と体について「知識がない」としていた学生が8人いたが、実習後には2名に減少した。実際に学生が得た知識の内容や程度は不明ではあるが、実習経験により、以前に増す知識が得られたことや、自信をもつことにつながり、実習前・後の変化がみられたのではないかと考えられる。

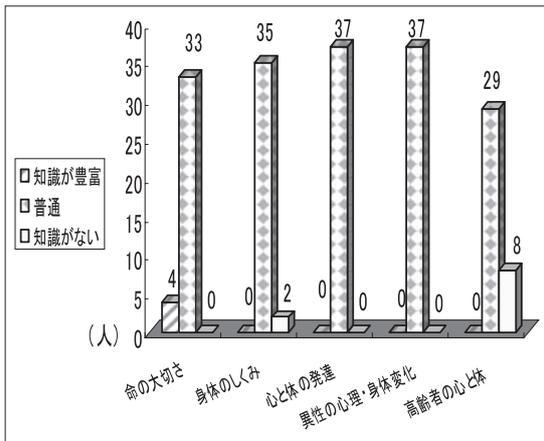


図5 性やヒトの成長発達に関する知識の程度 (実習前)

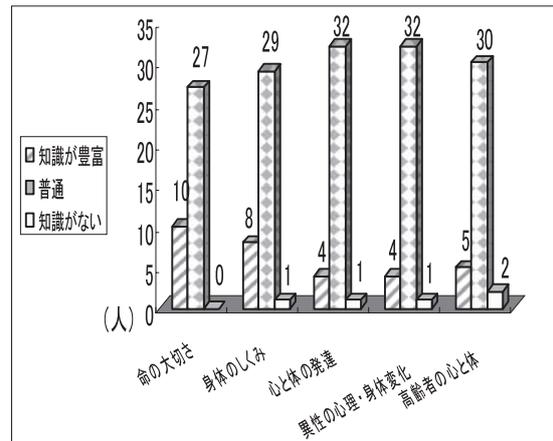


図6 性やヒトの成長発達に関する知識の程度 (実習後)

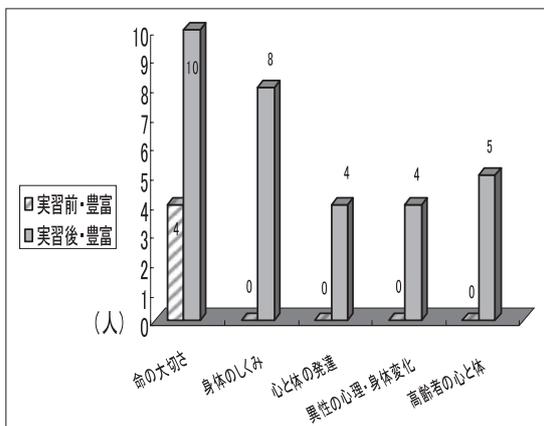


図7 図5・6で「知識が豊富」と回答した学生について

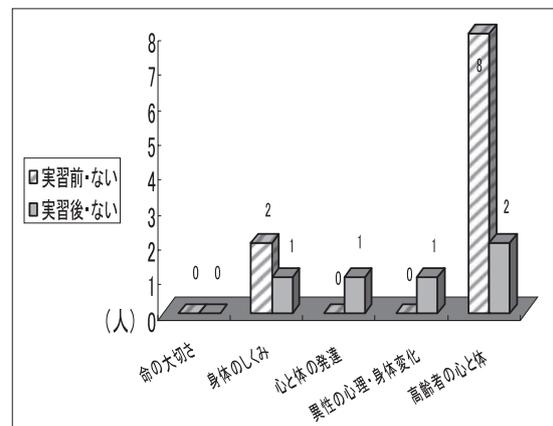


図8 図5・6で「知識がない」と回答した学生について

図9は、実習前・後に学生が性やヒトの成長発達について学ぶ意欲の有無について比較したものである。実習前に「学びたい」と意欲を示した項目については、「高齢者の心と体」29人、「命の大切さ」26人が他の項目よりも多かった。実習後には、「命の大切さ」と「身体のおくみ」各25人、「高齢者の心と体」24人、「心と体の発達」21人、「異性の心理・身体変化」17人であった。特に「身体のおくみ」、「心と体の発達」、「異性の心理・

身体変化」では、実習後に学習意欲をもった学生が増加している。学生達が、介護実習の経験により性やヒトの成長発達を学ぶことの必要性を認識していることや、図4で性やヒトの成長発達について興味関心が高まっていることに関連付けると、学生の意欲的な気持ちが表れていると考えられる。

吉田ら⁽⁵⁾は、学生達が疾病・障害・医療・看護に関する学習が不足していると考えている結果を導きだし、介護福祉士が医療・保健・福祉関連職と対等な立場で連携を図るために専門性を確立していくことを課題としてあげた。本調査は、羞恥心に視点をあてたものであるが、学生達がさらに広く専門的な知識を得たいと考えている点が類似していた。

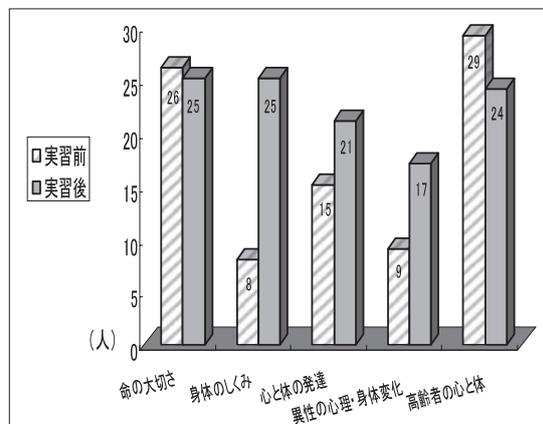


図9 性やヒトの成長発達を学ぶ意欲の変化

4 身体接触のある介護を実施する際の羞恥心について

図10は介護技術演習時に身体接触のある介護を実施する際に生じる羞恥心についての認識を実習前後の比較で示したものである。実習前には、「介護者役・利用者役ともに羞恥心がある」18人、「利用者役のみ羞恥心がある」11人、「介護者役・利用者役ともに羞恥心はない」11人であった。実習後も順列は実習前と変化なかった。しかし、「介護者役・利用者役ともに羞恥心がある」が25人と増加していた。次いで、「利用者役のみ羞恥心がある」7人、「介護者役・利用者役ともに羞恥心はない」4人と減少した。介護実習経験を通して、身体接触のある介護が羞恥心を生じる一因となること、また利用者のみならず介護者側にも羞恥心を生じさせることがあることを経験したのではないだろうか。もちろん、介助者が羞恥心を過度に持ち過ぎることも、羞恥心を全く感じられないことも適切な介護には影響はあるだろうが、実習を経て利用者・介護者の羞恥心の発生についての認識が変化していることは明確であろう。

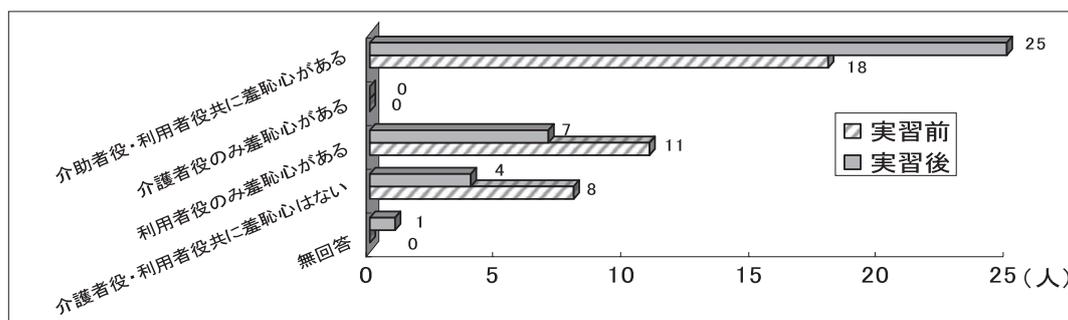


図10 演習時、身体接触のある介護を実施する際に生じる羞恥心についての認識

図 11 は、身体接触のある介護を実施することを前提に、学生が居室に入室した際に生じる羞恥心の度合いについて、実習前・後の比較を示している。実習前は、「少し羞恥心がある」19人、「とても羞恥心がある」12人、「あまり羞恥心はない」6人であったが、実習後では、すべての学生が「とても羞恥心がある」と回答した。このことは、周囲の利用者の存在や部屋に介護者が入室することで生じる利用者の気持ちに対する変化など、介護実習を通して広く物事を考えられるようになったことや、類似の経験からの学びを得たものとして考えられる。

東ら⁽⁶⁾は、看護における床上排泄援助の研究の中で、看護者が思っているよりも患者が配慮されていないと強く感じて不満に思っており、且つ患者が理想とするものより実際を低く認識されている項目として「病室への入室」をあげている。このことは、安井が「オムツをしていることは、最後まで他人に知られたくない。排泄介助のために居室に伺うその時からプライバシーを守る取り組みが始まる」³⁾ことを確認したと述べたことに大きく関連し、排泄ケアにおける羞恥心やプライバシーへの配慮を具体化することが、人間尊厳に関わる重要な要素として考えられる。

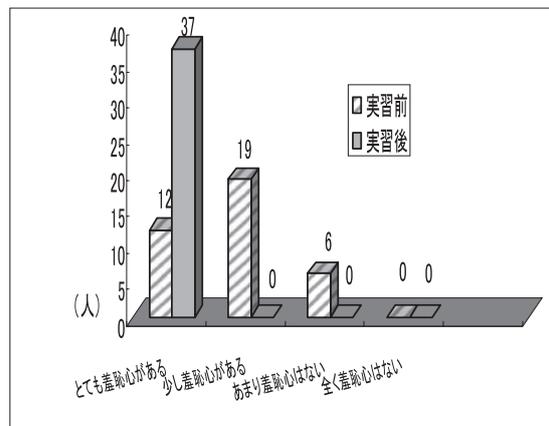


図 11 居室入室時の利用者の羞恥心発生についての認識

図 12 は、身体接触のある介護実施時に生じる羞恥心の有無に対する認識を実習前・後で比較したものである。実習前には、「排泄介助」35人、「入浴介助」27人、「衣服の着脱」22人、「清拭」14人であったが、実習後には、「排泄介助」36人、「入浴介助」33人、「衣服の着脱」29人、「清拭」29人とすべての項目において「羞恥心がある」と回答した学生が増加した。特に変化が大きいのは、「清拭」である。他の項目については、学生自身が日常生活を振り返ることから理解できる行為だが、実習前の調査時には「清拭」の演習前であり、説明はしたものの用語の理解ができていなかった可能性がある。また、23人の学生が実習で実際の清拭を経験したことにより、内容を具体化して理解され、このような変化がみられたことが考えられる。実習後の回答で最も少なかったのは、「衣服の着脱」である。6割の学生が羞恥心を生じたもの、その反面、4割の学生が「衣服の着脱」では羞恥心が生じないと考えていた。このことは、衣服の着脱介護には下着着用という状況が含まれていたからだと考える。

女性の性的羞恥心の現在をパンツの露出を視点として行った調査結果⁽⁷⁾では、日本女性には欧米文化の意識が定着し、陰部に一番性的羞恥心を示し、胸・尻といった身体部分への羞恥心が集中する傾向がみられた。日本女性は、パンツの露出を妨げるために足裁き

の躰を受けて育てており、露出を性的タブーとして形成する要因に日本の躰が大きいと考えられている。日本女性が抱く羞恥心の程度は、親密度の高い人にも羞恥心は強く存在し、若年の女性に限っては、その傾向が薄いとの結果がでていた。古き日本の下着文化、日本伝来の躰を受けて生きた高齢者と近代文化の中で育った介護学生では、下着に対する意識の差が大きいことが分かる。またこの研究で、パンツの露出を気にする高割合合いが伺えつつも、近年流行している見せる下着については約4割が恥ずかしくないと回答した。下着に関連した羞恥心の発生には、世代による差があること、躰に関連することが理解できた。

もちろん足裁きの躰に止まらず、挨拶や言葉遣い、服装といった基本的な生活習慣や家庭生活の中での躰という部分は、社会的常識であり、他者との信頼関係を築く上で大切なものである。これらは信用度の判断基準になることを、畠山⁽⁸⁾らも指摘しており、「学習して身に付けることではないが最近の学生には必要」という指導者からの言葉が聞かれたことを明らかにした。何ををもって常識とするかには難しい判断が伴うが、対人援助に関わる専門職を志すからには、社会的な常識を身に付けることは学生達に必要不可欠であろう。

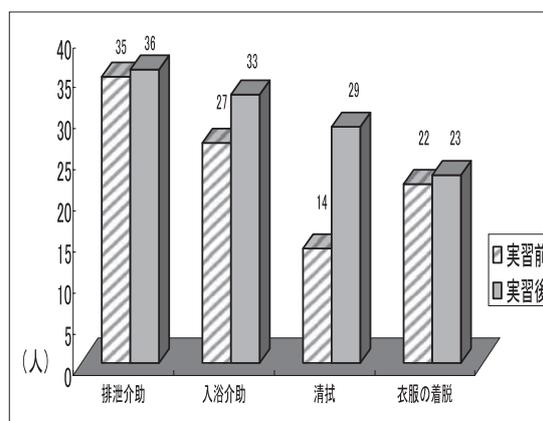


図12 身体接触のある介護実施時に「羞恥心がある」と回答した学生の比較

図13は利用者・介護者の性差による羞恥心の発生の違いについて、実習前・後の比較をしている。実習前は、「同性介助では異性介助より羞恥心が小さい」22人、「同性介助も異性介助も羞恥心の生じ方は同じである」13人、「異性介助では同性介助より羞恥心が小さい」2人であった。実習後の順位は実習前と同じであるが、「同性介助では異性介助より羞恥心が小さい」27人と増加、「同性介助も異性介助も羞恥心の生じ方は同じである」8人と減少した。これらに大きな変化があるとはいえないが、介護実習を経て、性別による認識の変化が生じていることが考えられる。

山田は、「人間は性的な身体を持ち、感覚、感情をもって社会的な意味世界の中で生活をしている存在である。介護行為を機能的に捉えると男性が行っても女性が行っても同じであるが、身体接触における身体感覚や感情には、性別によって異なった効果がもたれる」⁴⁾と述べ、利用者・介護者の性別によって、同じ介護行為であっても効果に違いが表れることを示唆している。学生の変化を考えてみると、その一つとして介護を機能的には捉えておらず、ヒトの感情をも考え受け止めながら実習を行えた学生がいたこと、その反面2割の学生については、何らかの理由により、感情の受け止めに差異がみられたと考

える。ヒトが行うことにより生じる羞恥心は、学習によるものである。従って、恥ずかしいとすることには、時代による変化があるが、それ故に他者の感情を敏感に受け止める必要があるだろう。

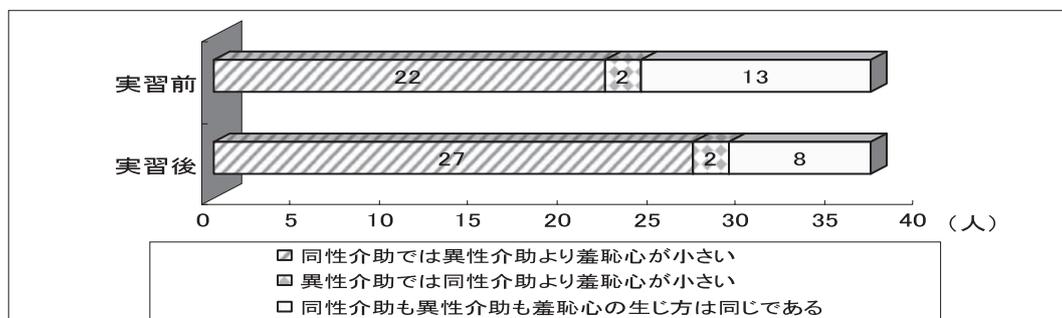


図 13 性差による介助時の羞恥心の発生についての意識変化

5 身体接触のある介護実施時の視点について

図 14 は、身体接触のある介護技術演習時に、実際の介護現場を想像することについて、実習前・後の意識の変化を示している。実習前・後ともに「あまり想像できない」と回答した学生が最も多く、実習前で 23 人、実習後で 17 人であった。全体としては、介護技術演習時に学生達は、実際の現場を想像することを困難だと感じていることが考えられる。しかし増加率をみると、「よく想像できる」「少しは想像できる」が実習前 8 人、実習後 16 人と増加傾向にあり、「少しは想像できるようになった」の増加が最も大きい。また、「あまり想像できない」「全く想像できない」は実習前 29 人、実習後 20 人と減少傾向にあった。実習経験により、介護技術演習を行う際に実際の現場を想像しながら実施することが出来つつあることが考えられる。

図 15 は、介護技術演習時に実際の介護現場を想像して演習することの必要性について、実習前・後の比較をしたものである。実習前には、「とても必要」22 人、「少しは必要」9 人と肯定的な認識が合計 31 人であった。実習後には、「とても必要」18 人、「少しは必要」14 人と合計 32 人と全体的には実習前・後の違いはみられなかった。しかし、「とても必要」が 4 人減少、「少しは必要」が 5 人増加し、肯定的な中でも消極的な意識がみられた。学生達は、実際の介護現場での経験を通して、学校での介護と実際の施設における介護との違いを認識したためとも考えられる。尾台らの調査⁽⁹⁾では、学生からの指摘として「職員によって指導の内容が違う」ことがあがった。このことは、学内で習得したものとも内容が違うことが理解できる。学内においては、介護に携わる基本的な姿勢や介護技術の基本的な確認に重点がおかれること、また施設では施設独自の介護方法により介護がなされること、また必ずしも統一した介護とは言えないことなどから、教育と実際の現場とのギャッ

プを感じ得る状況にあることが考えられる。

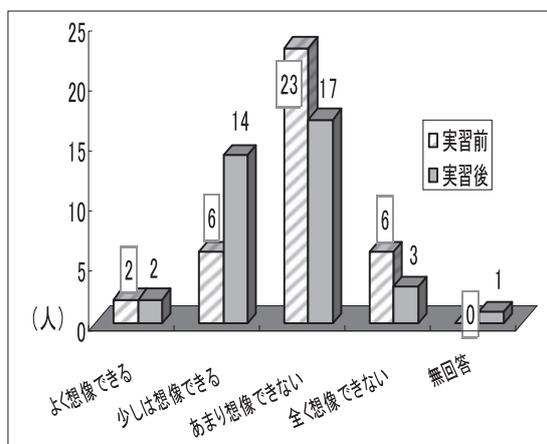


図 14 介護技術演習時、介護現場を想像することについての意識変化

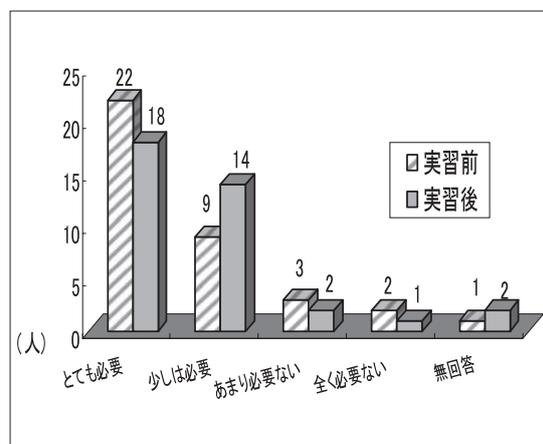


図 15 実際の現場を想像して演習することの必要性

図 16 は、オムツ交換において、また図 17 は衣服の着脱介助において①介護技術演習時に気になること、②介護実習での実施時に気になること、③記録時に気になることについて学生のもつ視点をまとめた。これらの視点は、すべて必要不可欠な視点であることを前提としての設問である。

介護技術演習時のオムツ交換では、実習前後の違いはほとんどみられず、学生は「正確な手技」に最も多く視点を向けて学んでいた。介護実習では、実習前には「利用者の気持ち」が 13 人と最も多く、続いて「正確な手技」10 人、「安全」6 人であった。しかし実習後には「適切な手技」が 15 人と最も多くなり、次いで「適切な声かけ」8 人、「利用者の気持ち」8 人であった。記録時には、「正確な手技」が実習前・後ともに最も多かった。また実習前・後の増加率をみると「安全」が 3 人から 7 人に増加している点が最も大きな変化であった。排泄介助では、実習前から利用者の羞恥心が発生する行為として学生達は認識していることが図 12 から理解できた。そして実習前には、利用者の気持ちを配慮しようという学生の姿勢がみられた。しかし実際の介護現場では、利用者の気持ちより正確な手技に視点が向き、初めての実習経験の中で、必死に行為を実施する学生と重なるものがある。

尾台らの調査では、一生懸命に行っているにも関わらず「少しでも手が止まるとサボっていると思われてしまう」や「職員と同じ行動をするように求められてもできない」⁵⁾などの学生の感想が述べられていた。利用者との関係づくりができて、施設の流れや職員との関係を築くために学生が苦慮し、利用者の気持ちを汲んだ介護の実施に気持ちが薄れる可能性もあるだろう。

介護技術演習時の着脱の介助では、実習前は「適切な声かけ」13人が最も多く視点が向けられていた。実習後においては、「利用者の気持ち」が10人と最も多く、実習前の3人から増加し、実習前には「利用者の気持ち」を上回っていた「正確な手技」9人、「適切な声かけ」7人、「安全」5人を越えた。介護実習時では、実習前には「安全」「正確な手技」「適切な声かけ」7人、「利用者の気持ち」6人とほぼ横ばいであったが、実習後には、「適切な声かけ」14人が最も多く、次いで「利用者の気持ち」8人、「正確な手技」7人であった。実際の介護現場では、利用者の残存能力を最大限に活かした介護方法が望まれる。学生達は、利用者が自力でできる部分については、声かけで動作を誘導し、また利用者のやる気を維持できるような関わりを担わなければならない。介護技術演習時にも介護技術の基本としての声かけの工夫や、関わりの仕方など助言があるものの、利用者役の学生達は関節も柔らかく介助のしやすさがあることも否めない。介護実習を経て、着脱介助に関わる「適切な声かけ」の難しさを学んだ結果が考えられる。さらに記録時には、「利用者の気持ち」「適切な声かけ」「正確な手技」が上位3項目を占めていることが実習前・後に共通であった。最も変化のある項目では、「安全」が2人から6人に増加している点である。介護技術演習時では、身近な着脱とあって、その危険性への認識は乏しかったのではないだろうか。前述にもあるように、学生と実際の利用者では身体状況が著しく異なり、骨折等の危険をも誘発する介護であることが実習により学べたのではないだろうか。すなわち実習経験を経て、学生が介護技術演習時、介護実習での実施時、記録時においてもつ視点に変化する傾向にあると考えられる。

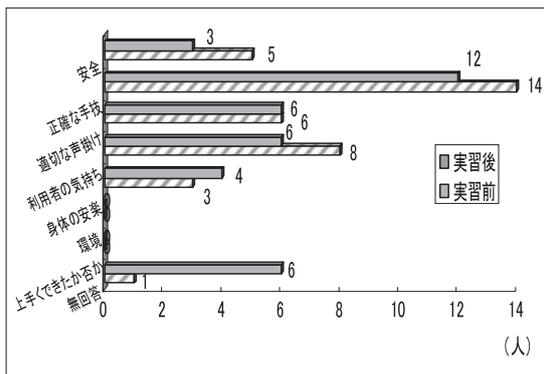


図 16-① 演習時に気になること (おむつ交換)

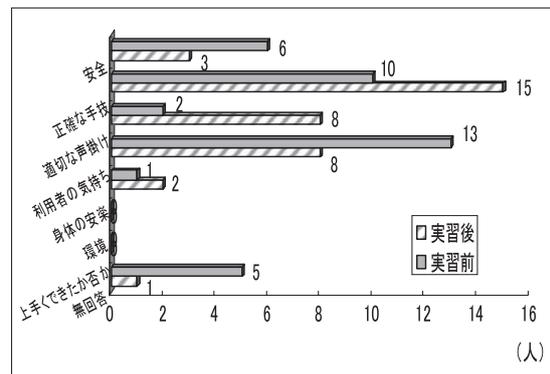


図 16-② 介護実習時に気になること (おむつ交換)

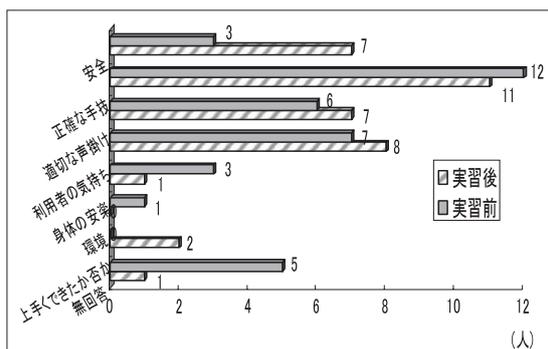


図 16-③ 記録時に気になること (オムツ交換)

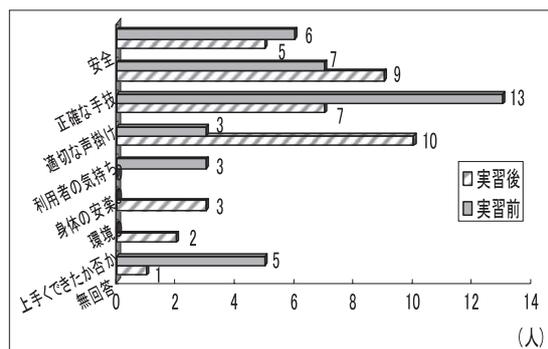


図 17-① 演習時に気になること (着脱)

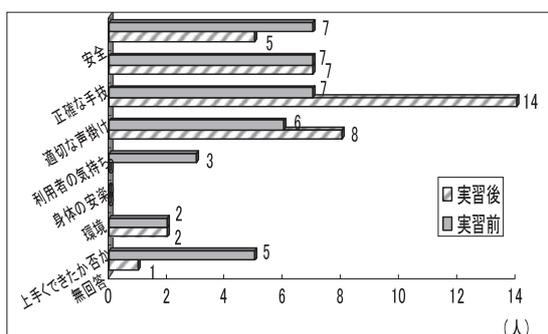


図 17-② 介護実習時に気になること (着脱)

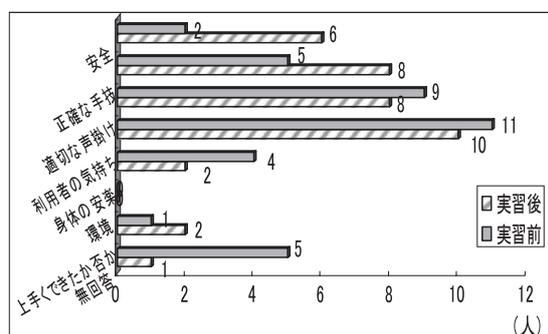


図 17-③ 記録時に気になること (着脱)

図 18 は、学生が身体接触のある介護を実施する際に、どのような視点をもっているのかについて、実習前・後の比較を示している。学生には排泄の介助に関連した 30 項目の具体的な援助方法を示し、特に気になる項目を 3 点選択してもらった。この排泄に関連した 30 項目の援助方法は、東氏⁽¹⁰⁾の「看護者間の実際の排泄援助時の配慮に関する認識のずれ」をもとに、10 項目ずつの群に分類した。そして一群が「羞恥心に関連する項目」、二群が「介護者の対応に関連する項目」、三群が「身体的な不快感に関連する項目」とし、その分布をまとめた。実習前では、三群「身体的な不快感に関する項目 (環境)」が 50 人と最も多く、次いで二群「介護者の対応に関連する項目 (手技)」34 人、一群「羞恥心に関連する項目 (羞恥心への配慮)」27 人であった。実習後には、二群「介護者の対応に関連する項目 (手技)」51 人と最も多く、一群「羞恥心に関連する項目 (羞恥心への配慮)」34 人、三群「身体的な不快感に関する項目 (環境)」26 人であった。以上のことから、学生が最も羞恥心が発生すると考えられた排泄介助について実習前後の学生の視点の変化をみると、明確な変化があったといえる。特に介護実習 I という初めての実習を経て、学生達が手技への視点を強めていることが分かる。このことは、図 16 において、実習前には利用者の気持ちを一番に考えられていたものが、適切な手技に意識が変化していることにつながる。介護が利用者にとって安全第一であることは言うまでもなく、どの項目も必要

不可欠で、様々な要素を総合的に駆使した結果、利用者にとって適切な介護になるだろう。しかしながら、介護者としての学生にとって自分の対応の善し悪しや、出来不出来といった事項に視点がいきやすい傾向にあることは明確であり、また繰り返しになるが、養成校における演習時の介護技術と、応用が求められる介護現場での介護技術ではその方法が施設毎に異なり、技術習得が未熟な学生にとっては、利用者の気持ちに最も重きをおいているというものの、実施することのみに集中し、声掛けや利用者への配慮に欠けることがあることもまた事実であろう。

東氏は、「患者に配慮がなされなかった時、苦痛に思うこと」で看護者の対応にはほとんど不満がなかったが、「羞恥心」と「身体的不快感」については、看護者が配慮していると思うよりも患者が配慮されていないと強く示すことを明かにした。特に排泄の援助では、介護者と被介護者間に認識のずれが存在することから、意思確認の困難な利用者に対して、介護者側が、どのような排泄援助を望んでいるのかを考え、行動する力も重要であろう。そして、十分な配慮に対する認識の上にも又、さらなる羞恥心が存在する可能性があることを理解し、利用者がもつ羞恥心と自分自身の認識のずれを認めた上での配慮が必要となることを知ることが大切であろう。

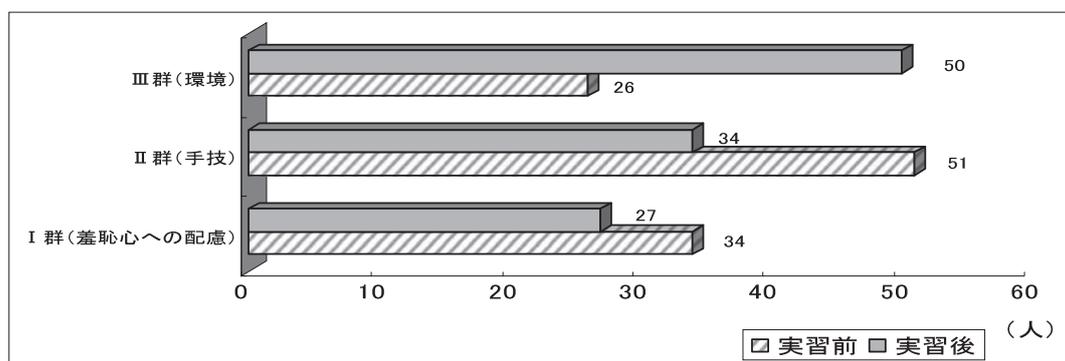


図 18 介護時に学生がもつ視点の変化

6 実習経験による意識変化の自己認識について

図 19 は、介護実習後に、学校での講義や演習の時間を大切に感じたか否かを示した。「とても大切に感じた」17人、「少しは大切に感じた」15人の肯定的な気持ちを示す学生が合計 32人、86%を占めた。「あまり大切に感じなかった」4人と否定的な気持ちを示す学生は少なかったが、一部の学生には、学内での学びが実習と全く結びつかなかった。

また図 20 は介護実習後に実習前にもっと学んでおく必要があったと感じたことについて示した。介護技術が 22人と最も多く 59%を占め、「人との関わり方、話し方」が 7人、19%であった。一方「必要なし」と回答した学生は 0人で、無回答 4名を除くすべての

学生達が何らかの学びを実習前にもっとしておくべきだと考えていた。実習を行うことにより、知識や技術の未熟さを知り、このような結果になったと考えられる。しかしこのような経験を経て、図 9 のような学びの意欲が向上したものと考えられ、次の実習への動機付けとなるのではないだろうか。

尾台らは、実習と授業との関係を、「実習は他の教科の統合と感じた」54.3%と半数の学生しか認識できなかったことを指摘した。本調査では科目の統合としての意識は不明ではあるが、少なからずとも、知識不足や対人援助技術の習得、介護技術の習得などの必要性を感じた結果として図 19、図 20 に表れたと考えられる。実習を有効に実施するためには、各教科での学びを広げ、科学的な根拠をもって介護を実施することも大切であろう。

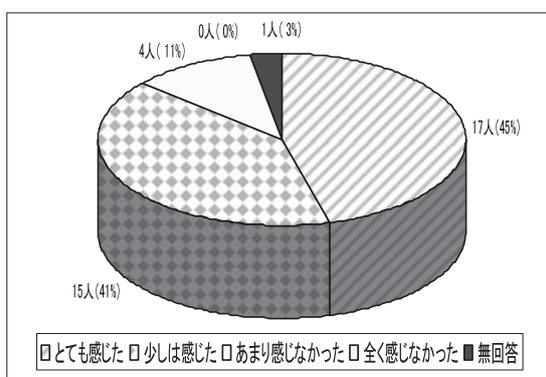


図 19 実習経験後、学校での講義、演習の時間を大切に感じる気持ち

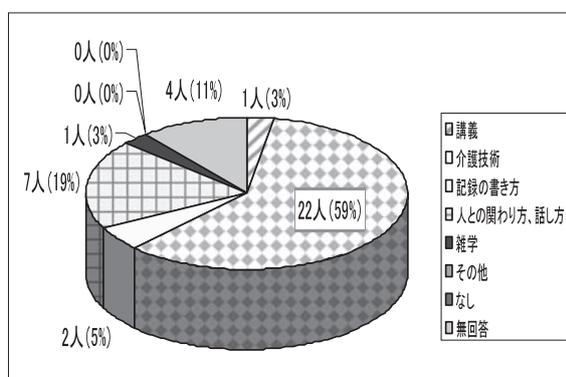


図 20 実習前にもっと学びが必要だったと思うこと

図 21 は、入学時と実習後での自分自身の変化についての認識の度合いを示した。「とても変わった」が 8 人、「少し変わった」が 17 人と合計 25 人、76%の学生が自分自身の変化を認識していた。学生がどのような点で変わったかは、「技術が身についた」という介護技術に関連することや、「介護職員の気持ちを知った」「この職業につくことを決心した」「やりがいを良く理解できた」など介護福祉士への志しに関連すること、「人との関わりの大切さ」「他人の変化に目を向けられるようになった」「利用者を思う気持ち」「利用者の考えをよく聞きたい」「町で高齢者や障害者の方を意識するようになった」など他者理解に関する意識変化、「学校に行くようになった」「世界観、価値観が変わった」「積極性が出た」「自分自身の甘さを変えられた」「精神的に強くなれた」など自分自身の意識や行動の変化に関連することがあげられた。そして記載したすべての学生が肯定的な変化を記し、複数の変化が見られたことを明らかにした。そのことにより、自己の一面だけでなく、多角的に自分自身をとらえようとしていることが理解できた。

また本調査では、学生自身が介護に対する興味関心の度合いや学習意欲の変化、演習時・

介護実施時の視点などの変化がみられていた。多くの学生には実習前・後で様々な意識変化が生じ、それらは自覚した上で次のステップにすすもうとしていることが理解できる。すなわち、このような意識変化を自覚できるということは、今後、学内での学びによる知識や技術を統合し、利用者との関わり中で利用者のニーズや日常生活上の課題に沿った援助の方法や技術を身に付け、介護観を形成していけるものと考えられる。そしてその中の一部分として、利用者の羞恥心への配慮を意図的に行えるものではないだろうか。

一方で「あまり変わらない」3人、「まったく変わらない」4人の合計7人、21%の学生が変化はないとする傾向を示した。尾台らの調査では、「実習が介護を学ぶ動機付けになった」という学生が24.5%と少なかったが、「介護に対する自分なりの意識をもつことができた」が52.4%であり、意識をもつことはできたという結果が導かれた。本調査でも80%の学生が肯定的な感情を示し、意識をもつことができたといえるだろうが、尾台らが否定的感情をもつ学生に対して指摘するような、「実習が介護業務中心になることにより影響を及ぼす」ことも念頭におく必要があるだろう。

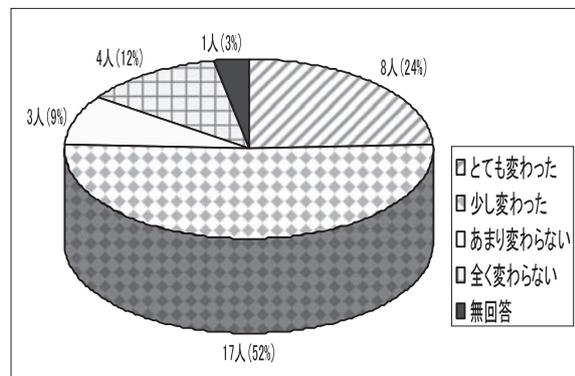


図 21 入学時と実習後の自分自身の変化についての意識

図 22 は、学生が介護福祉士を志す意志について、実習前・後の変化を示した。実習前には、「強い意志がある」21人、56%、「少しは意志がある」13人、35%、合計34人、91%の学生が肯定的であった。また「迷いがある」とした3人を除き、意思がないとした学生はいなかった。実習後には、「強い意志がある」11人、29%、「少しは意志がある」17人、46%、合計28人、75%と、強い意志をもつ学生が減少した。中でも特に、「強い意志がある」が27%減少し、「少しは意志がある」が増加した。また、「あまり意志がない」が4人増加し、「迷いがある」も5人であった。介護実習を経て、学生達の学習意欲は向上し、知識が増えるなどの多少の自信が得られたにも関わらず、将来を見据えた時に、その意欲が肯定的な中でも低下している傾向がみられた。

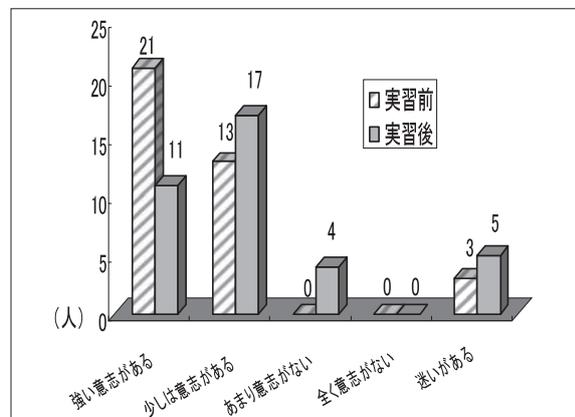


図 22 介護を志す意志の変化

尾台らによると、介護実習における学生の積極性と実習の充実感とは優位差が

みられないとするものの、実習に消極的で充実感の低い学生は、実習への取り組みが逃避的で介護福祉を学ぶことに不適応を起こしやすいという。また木田らは、学習や実習を経験した後に学生の介護意識が低下していることを示した。いずれにしても、介護技術演習や介護実習が学生達の将来に影響を及ぼす要素を持ち得ること、また本調査でも示された通り、将来への強い意志が低下する可能性も含め学生達を理解することが必要であろう。

V まとめ

- 1) すべての学生が、実習 I A において身体接触のある介護を実施していた。また異性介護についても7割の学生に実施経験があった。
- 2) 学生達は、介護技術演習や実習 I A を経験することにより、ヒトの性や成長・発達について興味を増し、特に「身体のしくみ」「心と体の発達」「異性の心理と身体変化」では、学習意欲が向上していた。
- 3) 身体接触のある介護を実施する際に生じる羞恥心の認識について、学生達の認識の変化がみられた。特に居室入室時から排泄ケアが始まること、利用者の羞恥心が存在することを意識し、他者への羞恥心について意識が向けられるように変化した。
- 4) 身体接触のある介護時、「衣服の着脱」では、利用者に羞恥心は生じないと認識した学生が4割いた。下着に関連した羞恥心の発生については、羞恥意識が低下していた。人生経験の豊富な利用者に関わる上での、基本的な生活習慣や生育上必要なしつけ、社会常識などといったものを見直すべき課題があがった。
- 5) 実習後の学生達は、介護技術演習時に実際の現場を想像する力が向上していた。しかし、想像することの必要性があまり認識されていなかった。介護技術演習時には、より現実的な利用者役を演じられることで、演習の効果が得られ、また学生にもその必要性が理解されるものと示唆した。
- 6) 学生達がもつ視点は、介護技術演習時、介護実習時、記録時によって変化する傾向がみられた。特に介護実習時には、「利用者の気持ち」に視点を向ける姿勢があっても、実際には、「適切な手技」に視点が向く傾向が特徴としてあげられた。
- 7) 学生達は、実習 I A を経験することにより、学内での講義や演習の大切さを認識し、実習以前からもっと学んでおくべきだったと感じていた。
- 8) 実習後の学生達には、介護観や自身の価値観、思考、行動の変化など変化がみられ、それらを自己認識することができていた。これらの変化が次の実習にすすむ動機付けとなることが示唆された。
- 9) 介護技術演習や実習 I A を経験することにより、介護福祉士を志す意志を強めた学生がいた。しかしその一方では、意欲の低下がある学生や将来に迷いを生じた学生の方

が多かった。就労以前の意欲消失の現状について、学生達が自信をもって介護を学んでいけるような関わりが今後必要である。

引用文献

- 1) 共栄学園短期大学：平成20年度シラバス（講義要項）。共栄学園短期大学，埼玉県，p107，2008
- 2) 菅原健介：恥について考える 教育と医学。慶応義塾大学出版，東京都，50-8：pp664-671，2002
- 3) 安井直樹：自分自身が介護を受ける視点で。ふれあいケア，全社協，東京都，pp18-21，2007
- 4) 山田昌弘：福祉とジェンダー—その構造と意味—。家族研究年報，17：p14，1992
- 5) 尾台安子^他：介護福祉実習に対する学生の意識と課題。松本短期大学紀要，13：p8，2004

参考文献

- (1) 託摩武俊：青年の心理。培風館，東京都，pp1-176，1993
- (2) 安田郁：青年期における羞恥感情に関する研究—青年期危機との関係から—。九州大学大学院人間環境学府，5：pp247-255，2004
- (3) 大柴譲治：罪 guilt と恥 shame：ルーテル学院大学紀要，ルター研究，pp127-151，2002
- (4) Max Scheller：シェーラー著作集第15巻『羞恥と羞恥心』。白水社，東京都，1978。pp30-32
- (5) 吉田弘美：4年制課程における介護福祉教育に関する一考察—学生の意識調査より—。東北文化学園大学，1：pp97-109，2002
- (6) 東あゆみ^他：床上排泄援助内容における患者と看護者間の受け止め方のずれ。日本看護学会誌，13-1：pp36-44，2003
- (7) 米澤 沙織：日本の女性の性的羞恥心の現在2章、3章。宮崎公立大学，pp1-26,2004
- (8) 畠山千春^他：介護実習指導のあり方を探る。共栄学園短期大学紀要，第20号，2004
- (9) 尾台安子^他：介護福祉実習に対する学生の意識と課題。松本短期大学紀要，PP1-9，2006
- (10) 東あゆみ^他：床上排泄援助内容における患者と看護者間の受け止め方のずれ。日本看護学会誌，13-1：pp36-44，2003
- (11) 安田郁：青年期における羞恥感情に関する研究—青年期危機との関係から—。九州大大学院人間環境学府，7：pp125-137，2006
- (12) 本田文子^他：学生の介護意識の変化—実習経験を通して—。静岡福祉大学紀要，第2号，2006
- (13) 吉野賀寿美^他：社会参加を支える施設での実習を通しての学生の学び。北海道医療大学看護福祉学部紀要，第14号，2007
- (14) 中村伸一：おばあさんの羞恥心とプライドを守った介護。現代農業，pp354-357，2007
- (15) 沼野みえ子：ホスピタリティを意識した実習指導—課題『介護の素敵な言葉探し』の効果—。新潟青陵大学短期大学部研究報告，第37号，2007
- (16) 菅原健介^他：青少年の迷惑行為と羞恥心。聖心女子大学論叢，107：57-77，2006
- (17) 友光興記：罪悪感，羞恥心と共感性の関係。心理学研究，77：pp97-104，2006
- (18) 横山孝子^他：学生の意識調査結果からみた介護技術教育の重要性のについての考察。長野大学紀要，27-4：pp75-87，2006
- (19) 奥田泰子：施設介護職員の性差と介護拒否経験に関する基礎研究。高齢者のケアと行動科学，第10巻第2号，2005

- (20) 米村敬子^他：排泄援助演習時における類似体験からの技術習得への課題．第 36 回看護教育，2005
- (21) 菊池章夫^他：自己意識的感情の喚起状況の構造－KA-JiKoKan33 を用いて－．心理学研究，pp1-2，2005
- (22) 冠木千代子：常識と羞恥心に関して．天垣女子短大紀要，pp57-76，2004
- (23) 浅見二巳子：泌尿器検査時の羞恥心への配慮．ウロナーシング，9:46-48，2004
- (24) 川村邦彦：『慣れと諦め』の向こうへ－第 1 段階実習報告会講評－．静岡県立大学短期大学部紀要，17-W-7，pp1-20，2003
- (25) 菅原健介^他：講座臨床心理学 3 異常心理 I．東大出版，2002
- (26) 大柴讓治：罪 **guilt** と恥 **shame**．ルター研究．ルーテル学院大学紀要，pp127-151，2002
- (27) 青木英夫：パンツが見える．朝日選書，東京都，pp146-148，2002
- (28) 小林陽子：老人看護学実習におけるオムツ体験学習の学びの分析．山梨大学紀要，17：pp84-90，2000
- (29) 菅原健介：人はなぜ恥ずかしがるのか－羞恥と自己イメージの社会心理学－．サイエンス社，東京都，pp1-229，1998
- (30) 久崎孝浩：恥および罪悪感とは何か．九州大学心理学研究，3：pp69-76，2002
- (31) 菅原健介^他：対人社会心理重要研究集（6）人間関係の自己．誠信書房，1998
- (32) 西平直：エリクソンの人間学．東京大学出版会，東京都，p1-304，993
- (33) 青木英夫：下着の文化史．雄山閣出版，東京，pp1-238，2000
- (34) 岡野憲一郎：恥と自己愛の精神分析～対人恐怖から差別論まで．岩崎学術出版社，東京都，pp1-282，1998